みことばの光　　ルカ 1:67~79

アドベントの間、わたしたちは、四本のキャンドルを灯して、クリスマスを待ちます。第一週のキャンドルは「預言のキャンドル」、第二週は「天使のキャンドル」、第三週は「羊飼いのキャンドル」、そして第四週は「ベツレヘムのキャンドル」と呼ばれます。それぞれのキャンドルには、テーマがあって、「預言のキャンドル」は「希望」です。その理由はわたしたちの希望は、「預言」、つまり、神の言葉から来るからです。希望の光は、キャンドルにたとえるなら、神の言葉という蝋を燃やしながら輝きます。ランプの場合は、神の言葉という油を燃やして光を放つのです。希望のないところで人は生きることが非常に難しいです。どんなに豊かなものを手に入れても、希望が無ければ、からだは生きていても、たましいは死んでしまいます。けれども、どんな逆境の中にあっても、たとえ明日も知れない生命の危険にさらされている場合でも、希望を持つ人の目は輝いています。人間の言葉には、絶望を癒す力はありませんが、神の言葉にはその力があるのです。

神の言葉が希望を与えることは、個人の場合も社会の場合も同じです。アモス書 8:11 にこうあります。「神である主の御告げーーその日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渇くのでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。」御言葉の飢饉。それは、実際の飢饉と同じくらい、いや、それ以上に恐ろしいものです。神の言葉が神の言葉として語られず、聞かれなくなるとき、人のたましいは枯れ、社会は荒れ果てていきます。御言葉から来る、ほんものの希望のかわりに、目先の楽しみや、モノの豊かさを追い求めたとしても、そうしたものでは、たましいは満たされることはありません。

ですから聖書は教えます。「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」ペテロ第二 1:19　御言葉に聞き、それを心に宿すなら、わたしたちの心から希望のともしびは消えることが無いと聖書は教えています。

神の民イスラエルは、紀元前 586 年に国を失い、それ以来、ユダヤの人々はバビロンやペルシャなどの大帝国に支配され、キリストがお生まれになったときには、ローマ帝国の支配のもとにありました。そんな中で、ユダヤの人々は、神の救いを待ち望みました。しかし、その救いがどんなものかについて、意見はまちまちでした。神殿を取り仕切っていたサドカイ派は、神殿儀式の中に救いを見ようとしました。サドカイ派は神殿さえ保たれれば、ローマ総督やヘロデ王と妥協するのをなんとも思いませんでした。パリサイ派は、そうした妥協を嫌い、ユダヤの伝統と律法を守ろうとしました。律法を守り行なうことが救いであると考えていたからです。熱心党は、武力でユダヤの独立を勝ち取ろうとしました。

人々はそれぞれ、自分の考えで「救い」を定義し、自分の好む「救い主」を描きました。神が約束された救い主、神の救いの御業を正しく理解していなかったのです。希望は神の言葉から生まれますが、その神の言葉を正しく理解していなければ、ひとりよがりの思い込みで終わります。「救い主」がどのようなお方で、その「救い」がどんなものかを、正しく知ることがなければ、希望は確かなものとはならないのです。

では、神の「救い」とはどんな救いなのでしょうか。77 節に「罪のゆるしによる救い」という言葉があるように、ザカリヤは、それは「罪からの救い」であると、聖霊によって預言しています。イスラエルの人々は、ローマの支配から救われたいと切実に願っていました。しかし、罪に縛られたままであるなら、ローマの束縛から救われたとしても、また別の国に束縛されるようになるでしょう。ある人は貧困か

ら、またある人は病気から、また、このトラブル、あの悩みから解放されたいと願います。経済活動が盛んになれば、貧困が解消され、医学の進歩によって病気が治ることもあるでしょう。しかし、罪から解放されないかぎり、たとえ目に見えるものから一時的に解放されたとしても、また別の苦しみや悩みに落ち込んでしまうのです。わたしたちの人生の根本的な解決にはならないのです。「罪の解決なしには、人は本当の問題の解決はない」と、聖書は繰り返し教えています。

「自分を愛する」、「自分を賞める」ということが推奨されています。自分の罪を嘆き悲しむなどというのは、自虐的であり精神衛生にきわめて悪いことであって、自分で自分を赦して、晴れ晴れとした気持ちになればいいのだと言われるようになりました。クリスチャンでさえ、それが「福音」であり、聖書の教えであるかのように考えるようになっています。しかし、聖書が教える「罪の赦し」は、そんな気休めのようなものではありません。ただひとり、罪を赦すことができるお方から、「わたしもあなたを罰しない」ヨハネ 8:11 という権威ある言葉を聞くことだと教えています。もし、罪の赦しが、たんに「心を軽くする」だけのものなら、わざわざ神の御子が人となって世に来られ、十字架でその生命を投げ出す必要はなかったのです。気にしなくても誰だってやっているから大丈夫だよではすまないのです。

聖書は救い主を「罪から救ってくださる方」マタイ 1:21 と呼び、救いのメッセージとは、「罪のゆるしを得させる悔改め」ルカ 24:47 であると言っています。どんなものも、また、世界の誰ひとりとして、人を罪から救うことができるものはありません。ただひとり、人となられ、わたしたちの罪のすべてを背負ってくださった神の御子、イエス・キリストだけが、わたしたちに罪の赦しを与えることができるのです。人は、罪の解決を得てはじめて、この世で力強く生きることができ、世を去ったのちも、永遠の幸いに入ることができるのです。この救い主を知り、この救いを受け取るとき、わたしたちは本物の希望を持つことができます。

そして、罪の赦しは、わたしたちを「きよく正しい」生活と、神への「奉仕」へと導きます。74〜75 節に「われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。」とある通りです。キリストの救いは「罪からの救い」です。しかし、それは同時に「きよさ」と「正しさ」、神への「奉仕」への救いです。聖書は「何から救われる」かだけでなく、「何に向かって救われる」か、「何のために救われる」のかについても教えています。一言で言うなら、私の救いには神様のご計画があるということです。神が、人の罪を赦してくださるというのは、人が罪の中に生き続けるのを、許可するということではありません。どんな罪も赦されるということは確かに福音です。しかし、だからと言って同じ罪を何度も繰り返しているならば、それはちょうど進んでは戻り、進んでは戻りというようなもので成長がありません。私が救われたということは神様に目的と計画があって救われたということです。神は人を、死から生命へ、闇から光へ、肉から霊へ、世から天へ、罪から「きよさと正しさ」へと救ってくださるのです。

新改訳 2017 では、「きよく正しく」を「敬虔で、正しく」と訳しています。「敬虔とは、神に対するきっぱりとした態度である」と言った人がいますが、その通りだと思います。「やみのわざを打ち捨てて」ローマ 13:12「以前は暗やみでしたが…今は、光の子どもらしく歩く」エペソ 5:8 ことです。まことの信仰者には、光と闇がまじりあったようなあいまいな場所などありません。光のあるところに闇はなく、闇のあるところに光はないからです。どっちつかずの生き方などありません。神が、わたしたちを救い、導き入れようとしている敬虔な生き方とは、ヨシュアが「もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地の

エモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える。」ヨシュア 24:15 と言い切ったような生き方です。つまり信じたならばそれにふさわしい生き方というものがあるでしょうということです。

もちろん、この地上で、どんな罪も犯すことがなく、完全に正しい生活ができる人は誰ひとりとしていません。クリスチャンであっても罪を犯すことがあります。しかし、まことの信仰者は罪を犯したとしても罪の中に沈みこむことはありません。悔い改め、さらに神に信頼して、きよさと正しさを目指すのです。なぜなら、今は、不完全であっても、やがての時、神がわたしたちを完全な者にしてくださるという希望があるからです。

旧約時代の人々が救い主の到来を待ち望んだように、新約時代のわたしたちも、キリストの再臨を待ち望んでいます。イエス・キリストは、二千年前に始めてくださった救いを再臨によって完成させてくださるのです。

わたしたちは、すでに救われ、今救われ、やがて救われます。救いの完成に向かっているということです。希望はこの救いから生まれます。それは、御言葉によって明らかにされています。わたしたちは御言葉によって希望を握りしめているでしょうか。聖書は、わたしたちにそう、問いかけています。預言のキャンドルを灯すとき、この呼びかけに答え、この週を過ごしたいと願います。